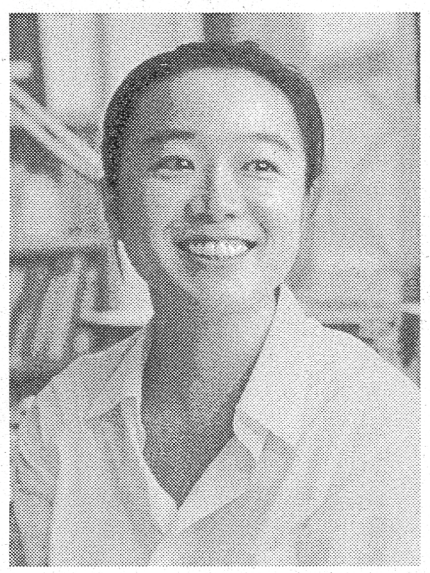
「開く」と「閉じる」を共時的に生み出す壁

空間で完結しない、意識の開放を目指す

JIA新人賞を受賞した
建築家 宮 晶子氏

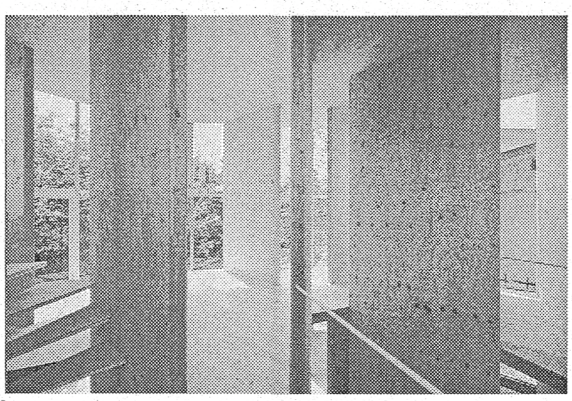
森や林の中に居るように人と人が緩やかにつながり、「見え隠れ」する建物（空間）をつくってきた。その空間は、周辺環境から切り取ったり、囲い込んだものではなく、周りの環境ともつながる。日本建築家協会（JIA）新人賞を受賞した建築家・宮晶子氏は、デビュー作の「那須の山荘」（1998年）からこの考えを貫いている。人の本能に働きかけるような「見え隠れ」を実現するために使ったのが自立した壁である。部屋のように閉じず、ワンルームのようにすべて開かない中立の空間になるよう、建築家側の思考に拘束をかけて壁を配置し、「創造的主体」として、使う人の心地よさを追求する。新人賞を受賞した「house K」は、13枚の自立壁群を全面のガラスで覆った。「空間それ自体で完結しない、意識としての開放性ある場を組み立てことを目指している」という宮氏に聞いた。



「house K」は、横浜市郊外で、両親の庭の一画に建つ子息家族の独立住宅だ。階高の極端に違う3つの階に、同じ配置の自立した13枚の壁を建てた。ひとつの壁が別の壁との交点を「余白」にしながら、2、3歩分の長さで、2、3歩分の間隔を保ちながらいろいろな方向に連鎖する生成の法則とした。その配置は、外部環境とリンクするさまざまな視線の関係などを基にしている。

「壁と余白によって、家の中にはガラスの向こうに広がる風景と一体になった小さな領域ができ、その領域が半歩踏み出すたびに、さまざまな方向につながっていく。そんなたくさんの『小さな風景』の中で、固定的にならない生活シーンの連続をイメージした」

壁の配置は、局所から全体を共時的に展望できる「極座標」を使い、「閉じる」と「開く」の中立的な状態とした。矩形の敷地から平行にセットバックせず、30度のモデュールを導入し、斜めを用いて不定形に建てることで、周辺との関係を調停している。



house Kの内観

「隣人などと正対すると目線がきつくなるが、斜めにすることで柔らかくなる。建て主さんの要望はとても建築的で、その一つは敷地境界という所有境界を超えて隣人とともに暮らす感覚をもちたいというものだった。私の理想とも一致したので、共通の考え方でスタートすることができた」

設計者が考えるピクチャー・ウィンドウを最終的な解にはしない。「house K」で極座標による幾何学を使ったように、直接的なコンテクスチュアリズムでもなく、近代合理主義でもない、最適解を探すために、必ずその場所に応じた「他律的」な法則を考える。

「その法則を見つけ出すのが私の仕事の大部分といってもいい。法則によって自分の思考に拘束をかけて逆説的に最適解を探す。それが住む人、使う人の自由を担保することになると思っている。『つくられた場所』で、創造的主体として人が自由に生きられることを目標にしている」

自立した壁は、人と人の緩やかなつながりによる心地よさも目指す。

「友人が建て主の『城東町の家』（2000年）では、4枚の壁を十文字の交点をボイド（余白）にしながら配置した。ここに遊びに行った別の友人が、建築の専門家ではないが、客人である自分が、わたしはわたし、あなたはあなた、と、家主（友人）との主従なく、過ごすことができたことが快適だったと言ってくれた。これは自信につながった」

「kogota seminar house」（04年）では、この半開きの壁のモデルを展開し、大中小の空間をつくった。建て主の社長は、スタッフが自分たちで、ふるまい方、使い方を考えることになるのはいいことだと評価してくれたという。

「house K」は、現地審査の時、住み始めて約3年経っていた。

審査に立ち会い久しぶりにじっくり見て、「新しい経験が立ち現れていたことがうれしかった」と話す。

「人は常に建築から影響を受けている。人の関係や気持ちを閉ざしたり開いたり。人を規定してしまう建築をどうしたら精神として開放できる場として提案できるのか。住宅も公共施設、オフィスビルなどでもそれは同じ。さまざまな建築にかかわることができたらうれしい」

（みや・あきこ）1986年日本女子大住居学科卒。86―91年レーモンド設計事務所、91―97年アルテック建築研究所、97年STUDIO 2A設立。現在、横浜国立大学、東海大学、日本女子大学ほか非常勤講師。受賞歴として99年栃木県マロニエ建築奨励賞（「那須の山荘」）、2000年AMERICAN WOOD DESIGN CITATION AWARD（同）、01年日本建築学会作品選集（同）、04年SDreview（「kogota seminar house」）、04年杉コレクション優秀賞（「ZEBRA chair」）、10年第26回新建築賞―吉岡賞―（「house I」）
http://studio2a.jp

建設通信新聞　2011年03月10日